

《巻頭言》

大震災・原発事故のその後

統括学系長

小島 彰

2011年3月の東日本大震災と大津波、そして福島原発事故の惨禍はなお記憶に新しいところである。また、福島市内でも渡利地区はじめ南光台、蓬萊地区と順次、放射性物質の除染作業が進行している。さらに、県全域ではN A Iによるコメの全袋検査が現在進行中であり、復興の歩みが徐々に始まっていると実感する次第である。

筆者は去る9月1日より3週間、オーストラリア連邦クィーンズランド州クィーンズランド大学に短期語学研修のグループリーダーとして滞在し、Fukushima Shockについて話す機会に恵まれた。学生たちは大震災・大津波・原発事故による惨禍でなく、祭り・花火大会・ボランティア活動、地域社会再建など positive な話題提供を軸にプレゼンテーションを行った。現地の大学の教職員・学生からの評判はすこぶる良好だった。そのときに感じたことは、意外に復興・再建に関する情報は伝わらず、否定的な内容の情報だけは伝わっているということだった。

福島大学における研究のある分野は、未来支援センターを軸に震災・原発事故後の研究・調査に傾倒しており、今後数年間は継続すると思われる。自治体、学校、産業支援などを主な領域とし、避難者への多方面にわたる生活支援、「仮の町」などの自治体の復興と再建、農地等の除染方法の研究、食の安全と安心に関する研究、風評被害への取り組み、観光を含む産業の復興など多岐に亘っている。

震災と原発事故の中で福島県全体をどのように再構築していくのか、その全体像はなお明確な見通し・道筋は定かではないが、当面する諸課題に正面から切り込みつつ、見極めていくしかないだろう。そのなかで地域社会における福島大学の研究面での存在価値を証明していくことが肝要であると考え